

---

# 羌暦年と国民文化

松岡 正子

<愛知大学>

## 要 旨

羌暦年は、1988年、四川省阿壩藏族羌族自治州政府によって制定されたチャン族の伝統の新年である。しかし少数民族優遇政策の一環として民族の伝統文化を復活させようとした政府および民族エリートの意図は、一般のチャン族の意識とは大きな隔たりがあった。それは、チャン族自身が独自の新年という概念をほぼなくしていたこと、羌暦年の基とされた秋の祭山会は、本来、山の神を祀るという宗教的活動を核としていたが、政府主導の羌暦年からはこの部分が消え、経済や文化の交流を柱とした新たな祝日として提示されたからであった。換言すれば、羌暦年の制定は民族アイデンティティを国家アイデンティティの枠組みの中に包括しようとした試みであったが、それは少なくとも新年という概念を通しては一般のチャン族にはほとんど受け入れられなかったといえる。

**キーワード** 羌暦年、国民文化、民族エリート、祭山会、牛王会

## はじめに

本稿は、羌暦年制定について国家側の意図とチャン族側の意識の違いを明らかにし、政府の主導による「国民文化」<sup>1)</sup>構築という動きとの関わりについて考察する。

1988年10月、阿壩藏族羌族自治州人民政府は、農曆10月1日をチャン族<sup>2)</sup>の新年「羌暦年」であるとして10月1、2日を全州の正規の祝日に定めた。州政府は、80年代に入って各地のチャン族代表と協議したうえでこれを決定し、「阿壩藏族羌族自治州自治条例」に基づいて「關於羌暦年放假的通知」を發布した。これをうけてチャン族が集中する茂県、汶川県、理県、北川県の県人民政府は、88年から順に羌暦年慶祝会を主催し、伝統文化芸術会や経済貿易交流会、学術検討会を開催した。筆者も、88年の第1回羌暦年慶祝会に参加して、会場で主催者側の熱気を感じた。

しかし当時、この日を伝統の新年として祝ったチャン族はごく一部にすぎなかった。羌暦年という言葉についても、90年代初期に筆者が調査した各地のチャン族は多くがこれを知らず、現在もその状況はあまりかわっていない。これは、政府が認定した羌暦年が多くのチャン族にとってはあまりなじみがなく、その制定にはなお問題があることを示すものである。

本稿では、羌暦年がどのような背景と意図のもとで制定されたのか、チャン族にとって政府が定めた祝日はどのような意味をもつのか、そもそも羌暦年とは何なのか、考察する。

## 第1章 羌暦年の制定

### 1. 定義

「羌暦年」は、1980年代になって頻繁に用いられるようになった用語である。管見の限りでは、70年代以前の資料にはほとんどみあたらない。『羌族詞典』[2004、387-388]には、つぎのように記されている。本事典は、四川省で長期にわたって民族工作に従事してきたチャン族出身の政府関係者を主任とし、複数のチャン族研究者が執筆したもので、州人民政府側の公式見解ともいえるものである。

- ①羌暦年は羌族伝統の新年で、最も盛大に行われた歳時である。
- ②チャン語では「日美吉」(リメジ)という。「好日子」「過年」を意味し、俗に「小過年」とよばれて漢族の春節である「過年」と区別された。
- ③目的は、収穫後に神と祖先に感謝し、「還願」を行い、一家団欒をする。
- ④起源は、秦漢以前に遡り、「羌暦」の太陽、月、星、辰(十二支)にもとづく。羌暦は1年を10ヶ月とした。
- ⑤期日は、農曆の8月1日(汶川・綿池一帯)、冬至(北川)、10月1日(その他の四川および貴州)の3種類で、地域によって異なる。一般に3～5日間行われ、7～8日間の地域もある。
- ⑥活動は、一家団欒と山の神に対する収穫謝、の2つに大別される。前者は、初日に一家で宴会「收成酒」を行い、第2日目からは一族が互いに招きあう。後者は、ソバ粉製のさすまた型蒸餃、小麦粉製のウシやヤギ、ニワトリ、ウマ型の饅頭(モモ)を供えて祖先や諸神を祀り、五穀豊穡や人畜繁栄を願う。全住民がシピ(シャーマン)に率いられて、ムラの神樹林にある白石を置いた石積みの塔の前でウシやヤギを犠牲にし、塔に血をたらし、頭骨を供える。その後、4人の男性が白石を担いでムラ中を回る。各人に犠牲の肉が分け与えられ、一家で祝う。地域によって異なる活動内容がある。
- ⑦かつて一つあるいは複数のムラ単位で実施されていたが、中華人民共和国成立後、集団としての活動は中止され、家単位で行われるようになった。

以上の記述は、従来のチャン族研究の成果に基づいたもので、1920～40年代の胡鑑民らの調査や50～60年代の中国少数民族社会歴史調査の一貫である『羌族社会歴史調査』、90年代に相次いで刊行された州志、県志を主な出所とする<sup>3)</sup>。しかしこの『羌族詞典』の記述については、さらにつぎのような検討が必要である。

第1に、羌暦年は、はたして「伝統の新年」なのか。かつて最も盛大に行われてきた歳時は祭山会(チャン語ではナヘシ、漢語では「山王会」「塔子会」「石碛会」「還願会」、あるいはチャン語でモトシ、漢語で祭天会)であり、政府が制定した羌暦年は、従来の研究では祭山会、祭天会として記されている。両者の違いはどこにあるのか、政府の定義は何によるのか。

第2は、羌暦年制定の背景である。羌暦年は、人民共和国成立前後から多くの地域で集団としては行われなくなっており、80年代には家単位でも衰退していた。にもかかわらず、なぜ政府はこの日を新たな祝日としたのか。一般のチャン族は、これをどのように受け止めたのか。

第3は、羌暦年の内容である。政府が奨励する羌暦年の内容は、従来の秋の祭山会とはやや異なる。県人民政府が主催した羌暦年慶祝会では、山の神に祈るという元来の宗教的側面がほとんど消え、歌舞や経済交流、学術検討会を主としたプログラムになっている。これには政府

側のどのような意図、メッセージがあるのか、またチャン族にとってこの変化はどのような意味をもつのか。

第3は、日にちについてである。秋の祭山会は、かつて地域によって10月1日と8月1日、冬至の3つの異なる日に行われていた。そのなかでなぜ10月1日が選ばれたのか。そもそも政府のいう羌暦とは何なのか。

## 2. 制定の背景

農曆10月1日は、元来、チャン族伝統の祭山会が行われていた日である。しかし祭山会は、80年代初期にはすでにほとんど行われなくなっていた。30～40年代の戦乱期に規模が縮小され、さらに人民共和国下の政治運動で迷信活動とされることを恐れて50年代後期頃からはほぼ自主的に中断された。また90年代になっても復活した地域はあまり多くなかった〔西南民族学院民族研究所 1954；松岡 2000、135〕。

例えばかつて盛んに行われていた理県蒲溪郷でも、10月の還願や2月の許願はシビや60代以上の老人が記憶しているにすぎない。しかもシビや老人は高齢化あるいは死亡して次世代へ伝承できる者が激減している。古老らによれば、この祭りには多額の経費が必要であるため負担が容易ではないという。またほぼ1世代にあたる30年余りの中断の結果、中年以下の世代はリメジを体験したこともない。〔松岡 2000、227～229〕。

では、阿壩州人民政府は、なぜ、多くの地域ですでに30年以上も中断していたリメジを新年（羌暦年）として復活させたのか。これには、1986年の阿壩藏族羌族自治州の誕生が深く関わっている。

歴史を遡れば、四川省西部はチャン族やチベット族の居住地であり、大渡河東部は人民共和国成立後の53年に阿壩藏族自治州、55年に阿壩藏族自治州になり、58年には全国初のチャン族自治県である茂汶羌族自治県が成立した。しかし清末以降に漢族が大量に移入した結果、1950年の人口比はチベット族51.5%、チャン族10.4%に対して漢族は35.6%に達した。これに対してチャン族は、1950年には総人口が36,866人にすぎず、54年には黒水県のチャン族がチベット族に変更されたためさらに減少した。しかし80年には88,394人（州総人口の12.54%）に増え、90年までに55年の5.6倍の約13万人、全人口の17%まで増加した。ただしこの増加には、自然増加に加えて民族改正による人為的増加が多く含まれている。83年の民族区域自治法により政府機関要員の一定分が現地民に割り当てられたり、一人っ子政策の優遇処置など80年代から少数民族優遇の諸政策が進められた結果、漢族からチャン族に民族改正を申請する「民族回帰」が相継いだ。90年には人口増加の約6割が民族変更による人為的増加であった。〔松岡 2000、69-78〕。

阿壩藏族羌族自治州への改名は、このような民族回帰現象に連動している。改名は三中全会後から民族代表の意見を聞きながら検討され、86年には民族区域自治法に基づいて四川省人民政府に申請され、87年7月24日に国务院の批准を受けて正式に決定された。阿壩藏族自治州の名称にチャン族が加えられたことは、チャン族にとって自民族集団の存在が国家によって大きく認められたことをアピールするものであり、民族の誇りを表すシンボルでもあった。

そして1年後の88年には「阿壩藏族羌族自治州条例」の第1章第6条民族独自の言語や風俗

習慣、伝統行事を尊重するという方針に基づいて羌暦年が制定された。これは、まさに政府に主導されたチャン族の民族意識の高揚と団結を象徴するものであった。換言すれば、羌暦年の制定は、国家が進めた少数民族優遇政策の一環ともいえ、これによって羌暦年は政府が奨励する国民文化の中の民族文化として公式デビューをはたしたといえる。

### 3. チャン族にとっての「羌暦年」

では、一般のチャン族は羌暦年をどのように受け止めたのか。

王明珂は次のように報告する〔王 2003、346-347〕。多くのチャン族はかつて「羌暦年」という習俗はなかったと思っている。北川県の老人によれば、87年に茂県らチャン族が居住する各県は、それぞれ数人ずつを成都のチャン族のもとに派遣して10月1日の羌暦年を祝わせた。その後88年は茂県、89年は汶川県、90年は理県、91年は北川県において羌暦年祝賀会を行った。そうやって「伝統」を作り上げた。しかし一般大衆はこのような羌暦年に反感をもっている。すなわち多くのチャン族の記憶の中では、羌暦年は伝統的なものではなくむしろ逆である。チャン族にとって羌暦年が始まった時とは、経済の好転、多くの観光客、いつも演じられるようになった歌舞などの事象に代表される、一つの新しい節目を意味する、と。つまり羌暦年は、一般のチャン族にとっては、突然、上の方から新しい祝日として奨励されたものであり、少なくとも北川県のチャン族にとっては全く覚えのない10月1日であったという。

しかし羌暦年の制定にあたっては、複数の「羌族代表」が参加し、意見を述べたとする。『羌族詞典』〔2004、388〕によれば、「(州人民政府は)中共十一届三中全会後、各地のチャン族に意見を求め、茂県や汶川、理、松藩、北川の各県のチャン族の代表が協議をし…」とある。

ではこの羌族代表とは、どのような人々なのか。例えば張永年氏(1929-)は、茂県出身のチャン族で、茂県内の郷長や副県長、県人大、州政協副主席を歴任し、チャン民の信望が厚い。彼は、94年のインタビューで、三龍郷の歳時について5月の祭山会と10月1日の羌暦年を明確にわけ、前者は封山を規定し、後者は収穫を祝うとともに盗難や公益活動などの郷規民約を協議すると語る〔俞榮根 2000、512~513〕。実は、このような祭山会と羌暦年を区別する説明のしかたは一般のチャン族にはほとんどない。彼のような国家によって育てられた民族幹部あるいは教師のような知識人であってはじめて可能である。チャン族代表として羌暦年制定を検討した民族幹部は、一般のチャン族の意見というよりは、むしろ民族エリート自身の意識を代表している。民族エリートは、「国民」としてのチャン族という立場にたち、民族の「利益」を考えて政府側の考え方を人々に普及させる役割を担っていたといえる<sup>4)</sup>。

このように羌暦年をめぐる政府側の意図と一般のチャン族の意識の違いは、民族エリートと一般チャン族の意識のズレであった。すなわち何をチャン族のシンボルとするか、という点でのズレである。民族エリートは、汶川や理県東部で10月1日に行われてきた秋の祭日にチャン族の新年という概念を加えて羌暦年という新語をあたえた。しかし羌暦年という新たな新年の概念は、前述の地域以外の者にとっては唐突であり、すでに春節が新年としてかなり普及していたことなどから受け入れにくかった。また仮に秋の祭山会を受け皿にするとしても、日にちの点で他地域の人々にとっては不服であった。

さらに政府は「鍋庄舞」と「收成酒」を活動の中心として奨励した。しかし王明珂の報告(2003、

347-349)によれば、この「鍋庄舞」は、民族の伝統の踊りではなく、隣接するギャロンチベット族の影響を受けたチベットの跳躍の動作を伴う比較的新しい踊りである。古老によれば、チャン族が古来伝える踊りの中に跳躍はなく、回るといふ動作だけである。解放後に若者が外部から持ち帰り、89年以降チャン族知識人がこれを熱心に奨励した結果、催し事には必ず踊られるようになり、若者の娯楽として受け入れられているという。

また従来この日を祭山会として祝ってきた者にとっても、内容的に大きな変化があった。羌暦年では祭山活動など宗教的部分がカットされ、新しい歌舞が活動の中心にすえられた。しかし従来の10月1日は、山の神に対して収穫を感謝し、様々な災害から住民を守って人畜の繁栄を願うことが中心の活動であった。そしてその中心にいたのがシピであり、シピが伝える儀式や口頭伝承こそチャン族の伝統文化を代表するものであった。少なくとも中高年以上の住民は、シピを中心とした様々な伝承が彼ら独自のものであることを理解していた。しかし文化大革命では多くのシピが批判され、白石ウルピやシピの法具など宗教的なモノが焼かれ、失われてしまった。80年代に改革開放が叫ばれ、文革中の政治運動は終了したといわれても、80年代当時、なお人々は政府がどのように方針を変更したのか、迷信とした宗教的部分をどこまで認容するのか疑心暗鬼であった。筆者の調査では、90年代半ばになっても人々の記憶から文革期の出来事は消えておらず、特にシピおよびその子孫の態度は慎重だった。

そのため羌暦年慶祝会で文化芸能が中心とされたことは、政府が容認する少数民族の民族文化とは宗教色を消したものであると受けとめられた。かつて少なくとも1940年代までは、汶川や理県東部において10月1日に神を象徴する白石ウルピを安置した石積みの塔ラシの前で天神や山神を祀ることが行われていた。しかしこれらの儀式は50年代に中断されたまま次世代に伝承されていなかった。そのため政府が「国民文化」の範疇で奨励したチャン族の新年「羌暦年」の概念は、老中世代にとっては祭りの本質である信仰部分が失われており、若者世代にとっては、新年はすでに漢族の春節であり、ほとんど記憶のない伝統の新年を上から言渡されたということであった。

ただし新しい世代にとっては、政府の指定した内容のほうが受け入れやすいともいえた。「鍋庄舞」は、隣接するギャロンチベット族の影響を受けた新作の舞踏であるが、伝統のそれより華やかであり、若者は娯楽運動として受け入れていた。すなわち羌暦年は、伝統の新年の復活ではなく、政府主導による新しい文化の構築として受け止められたといえる。

## 第2章 羌暦年と祭山会

### 1. 羌暦年と冬至歳首暦

では、羌暦年とは一体何なのか。そもそもチャン族に独自の暦というものはあったのか。州人民政府の公式見解ともいえる『阿壩州志上』[1994、463-464]は、つぎのように記す。

羌暦年の習俗は、経典「木姐珠（ムジジョ）」に由来する<sup>5)</sup>。ムパ（天帝）の末娘ムジジョはチャン族青年トアジュと結婚して下界に降りた時に両親から樹木や食糧の種、家畜を贈られ、それによって人間が繁栄した。それを天神に感謝した日が羌暦10月1日である。しかし時とともに「古羌暦」はシャーマンが占いをする時に用いられるだけになり、新年は農曆の10月1日に行われるようになった。またこの日は「還大願」ともよばれた、と。

『木姐珠』の物語で強調されているのは、チャン族には「古羌暦」というシャーマンが用いる独自の暦があった、天帝ムパの伝説に由来する、還願、の3点である。

では、古羌暦とは何か。チャン族は固有の文字はもたないが、儀式や物事を決める時にシャーマンが太陽や月、星などの運行や自然現象から事柄の吉兆を占い、日にちを決定した。いわゆる日読みによる民間暦である。日読みは生活の技術の一つであり、古老によっても伝えられた。伝説で語られたシャーマンの古羌暦とはこの日読みのことではないかと思われる。農曆のように日にちを固定した暦は、広い地域で通用し、また支配者側が民衆を統治するには不可欠の国家行政の基礎である。しかし固定された暦は時の経過とともに太陽や月の動きとのズレが大きくなり、実際の季節とは合わなくなる。そのため民間では、実際の農事や儀式は自然界の動きを見定める日読みによって行うことが少なくない。

経典「木姐珠」は南部方言地域のチャン族だけが伝える伝説である。この伝説にはムすなわち火、天の火＝太陽が重要なモチーフとして登場しており〔四川省編輯組 1986、161-166〕、天から遣わされたというシャーマンの暦にも太陽の運行との繋がりが推測される。『茂汶羌族自治州志』〔1997、677〕には、羌暦は最も早期の太陽暦であり、古羌人は羊角で時を決めた、羌年は1年を10ヶ月に分けたが、秦漢以後、次第に12ヶ月に分ける農曆に替わった、と記されている。ただし太陽暦であるという羌暦の具体的な記述はない。

しかし1年を10か月とする羌暦は、族源で近い関係にあるとされる彝族の10月太陽暦との関連を連想させる。彝族の10月太陽暦は、1年を10か月に分けてひと月を36日とし、過年の日として5～6日を加え、1年を365.2422日に数える。また太陽の運行に従って1年を寒暑に大別し、冬至から2日間を過小年、夏至から3日間を過大年とする。火把節は後者を彝族の新年としたものである〔陳久金等 1984、166-169〕。これにならえば、チャン族の羌暦年は前者の冬至を新年とするものであり、羌暦10月1日はその日にあたる。

「還願」の儀礼については、「許願」も考えなくてはならない。例えば理県大蒲溪では、2月に許願、10月に還願を行う。両者の活動内容は類似しており、シピの王氏によれば両者はほぼ同じだという。ソバ粉で作った鳥獣あるいは人形を砕いて害獣や災いの駆逐を願い、ニワトリやヤギ、ウシなどの家畜を犠牲にして五穀豊穡を願いあるいは感謝して山神に祈る。特に2月の許願では、牛の背に小枝で作った犁型を乗せてチンクー麦の種子を天に向かって撒く予祝をしたり、崖から吊るした肉塊を銃で撃って年占を行ったりする。また村人が祖先の歴史を演じて集団への帰属意識を確認する〔松岡 2000、229-235〕。このように彼らの許願と還願には農耕儀礼との密接な関係がみられるとともに、彼らが1年を2月から9月までの農繁期と10月からの冬の農閑期によって2分する生活サイクルを行っていたことを示している。

これに対して王明珂は、以下の理由からチャン族固有の暦の存在について否定的である〔王 2003、345-346〕。①チャン語には、月や年の概念はなく、一年は暖かい日（春と夏）と寒い日（秋と冬）に2分されるだけである。②チャン族には、ウシやヤギを犠牲にする「還願」の儀式があったが、これは地域によって10月1日、8月1日、6月1日あるいは冬至に行われていた。③1940年代にTorranceや胡鑑民が汶川や理県東部で10月1日の「還願」をみて収穫祭とし、伝統の新年と記した。しかしこれは現地では「牛王会」とよばれ、あるいは冬至と混乱して「過小年」ともよばれた。「牛王会」も「冬至」も漢族の習俗である。ともに「漢化」の深い

農業地域で行われたもので、西または北の半牧畜地域では牛王会は簡単であるか、或いはほとんど行われていない。④チャン族の新年としては、20世紀にすでに漢族と同じ春節が行われていた。以上のことから Torrance や胡鑑民は漢族から導入した10月1日の牛王会を伝統の新年と誤解したもので、チャン族には伝統の歳時などなかったのではないかとする。

しかし王明珂のあげた理由については、別の解釈も可能である。王は、チャン族が1年を暖かい日と寒い日に2分するだけで月や年を表す言葉をもたないことから「暦」はなかったのではないかとする。また羌暦年を行ったとする日が10月1日だけではなく、6、8月の1日および冬至などいくつもあることに疑問を提している。しかし1年を寒暑で2分することこそ、太陽暦の最も原初的な1年の観念である。また6、8、10月という数字は、羌暦を彝族の太陽暦に類似したものと仮定すれば互いに関連をもった数字であることがわかる。彝暦では一年を寒暑で2分し、10月の冬至と6月の夏至をその節目で過小年と過大年とする。またこれは、漢族の民間暦「九九消寒」<sup>6)</sup>のとらえ方にも似ている。九九消寒とは、太陽の日照時間が最も短くなる冬至から数えて九九=81日目までを寒い時期とする民間暦で、冬至から寒さが厳しくなり、やがて立春をすぎて暖かさにむかい、81日目頃に農耕の開始（春耕）を迎える。これは冬至を1月1日とする冬至歳首暦に基づくもので、冬至を過年とする点において彝暦や羌暦と共通する。

以上のように、古羌暦は1年を冬至によって寒暑に2分する冬至歳首暦に類するものと推測される。とすれば10、6、8は冬至歳首暦に関わる基本的な数字である<sup>7)</sup>。冬至は、太陽を直接に観測することによって求め得る日であり、太陽の蘇りが人の命の蘇生と結びつけられて1年の初めとされたもので、冬至歳首暦はユリウス暦など古くより世界の各地でみられた〔青木1982、74-101〕。中国においても「ふつう中国の暦では、冬至11月中を暦元の日とする」〔藪内1990、277〕とされ、周代に行われ、秦代では始皇帝が受命改制度の思想に従って年始の朝賀を10月朔に行った〔藪内1990、22-23〕。民間でも明代の土木の変（1449年）頃まで春節と同様に盛んに行われたという〔中村1988、222-249〕。漢族と比較的早くから接触した北川県のチャン族が羌暦年を冬至に行ったというのは、王明珂のいうような混乱ではなく、かつて漢族の民間で行われた冬至歳首暦の影響であり、チャン族側にもその受容の素地として冬至歳首暦の記憶があったのではないかと考えられる。

## 2. 10月1日の祭山会と牛王会

では、古羌暦10月1日は、なぜそのまま農曆10月1日に移行されたのか。これは、チャン族がどのように農曆を受容したのかに深く関わっている。

岷江流域のチャン族は、考古文物や史料によれば、おそくとも紀元前に中国西北の辺縁部から南下して現在の土地に移ってきており、史詩「羌戈大戦」には先住民戈人と戦って土地を奪い、彼らに農業を学んで定住したと語られている〔李1985、203-210〕。

そしてさらに灌県（現在の都江堰）まで南下して漢族と接触するようになった。特に理県東部や汶川の南部方言区のチャン族は、収穫後の10月から成都平原の漢族地区に井戸堀や荷担ぎ、堤防修理の工夫として出稼ぎに出て春耕に戻るといった農閑期の生活サイクルをすでに漢代から行っていた〔李1985、210-213〕。それは、かつて毎年10月に都江堰（現在の灌県に紀元前か

ら築かれた大灌漑施設)の修理が開始されていたからである。清・康熙48年(1709)、都江堰の歳修はそれまで各県に人夫が割当られていたのが、人夫1人につき銀1両を供出する「折納銀制」にかわり、雇われた「蛮夫」の中にチャン族がいたという〔南 1992、97〕。筆者の涪門郷での聞き取りでも、1930~40年代の主な出稼ぎは灌県一帯であった。

これらによれば、チャン族は岷江流域への定住を境に牧畜を主とした生業が茂県北部の北部方言区は半牧半農型、その他の南部方言区は農業中心型へと大きく変わった。さらに南部方言区のチャン族は、漢代から冬の農閑期には漢族地区へ毎年定期的に出稼ぎにでており、漢族側が農閑期に入る10月は彼らの生活サイクルを決定する必要条件となっていた。農閑期の出稼ぎはチャン族にとって漢族世界という異なる生活習慣をもつ社会に通じる窓口であり、そこに入りするには当然、その社会の言葉や暦などを「共通言語」とする必要があるからである。

10月1日という数字は、羌暦と農暦の双方にとって重要な日である。チャン族にとっては伝統の祭山会が行われた日である。チャン族各地の祭山会<sup>8)</sup>は、開催時期は異なるが、活動内容はほぼ似ている(表1)。ラシの前で犠牲獣を捧げ、シピが山の神や祖先の力を借りて経文や行為の呪力によって自然や山の鳥獣の管理を願い、人々への加護を祈る。また13歳になった男子をムラの正式な構成員として認める儀式を行う。開催の日には、南部方言区の春秋2回の場合と北部方言区の5月あるいは6月に1回行う場合がある。このうち南部方言区では、さらに生業の中心である農業に深く関わる内容がみられ、害獣の駆除や豊作祈願の予祝、収穫感謝等を春の許願と秋の還願に行う。

〔表1〕理県・汶県・茂県の「祭山会」

地域名	日時	祀場	神	犠牲・供物	内容
①上水里	10/1	広場 神樹林	白石神	山羊・酒	シエグの跳舞、山羊の血を白石にかける。
②龍溪	10/1	小高い 所	玉皇 寨神、山神	牛・山羊・鶏 蕎麦粉製の鳥獣	麦粉製の獣を刀で刻んで穴に埋める。(第6表)
③中三枯	10/1	ナヘシ 神樹林	白石神	鶏・山羊	外部の者は入村不可。
④新番旧 番二十 余寨	10/1	ナヘシ	白石神	豚(家ごと) 白旗	出稼ぎ者との送別の宴。
⑤三齊十 八寨	10/1	ナヘシ	白石神		1日目は外出しない。2日目から一族内で招き合う。 出稼ぎ者との送別の宴。
⑥上三里 後二枯	10/1	牛王廟	牛王神	鶏	
⑦立木基 季瓦	8/1	神樹林	白石神 山王	白旗つきの杉枝 白雄鳥・黒山羊 粉製の山・鶏・杯 山羊・酒	チンクー麦を撒く。 麦粉製の山や鶏等を粉々にして撒く。 山羊を殺して血を撒く。 鍋庄舞、社戯。
⑧九子屯 木宅寨	8/1	洞窟	山王		鍋庄舞、社戯。
⑨三叉寨 坪石頭	8/1	洞窟	山王 白石神		社戯、史詩を唱う。
⑩乾溪溝 寨	8/1	廟 洞窟	白石神 山王	山羊・鶏 蕎麦粉製の山・鶏 杯(水)	チンクー麦を撒く。 麦粉製の山などを粉々にして撒く。
⑪雁門羅 朴寨	8/1	神樹林	白石神 東岳廟 玉皇	一族ごとに山羊と鶏を捧げる	村人はシェピにトウモロコシの種を投げ、地面に落ちた種を鳥に食わせる。
⑫綿池郷 簇頭	8/1	神樹林	白石神	山羊・鶏・蕎麦 粉製の鳥獣	チンクー麦の種を鼓上に撒いて豊作を占う。
⑬三龍郷	5/5	神山の ナヘシ	山神	山羊・雄鶏・チンクー酒	(第7表)

〔出所〕①~⑩は胡鑑民(1944)「羌民之經濟活動型式」より、⑪⑫は1991年現地での聞き取りより、⑬は四川省編輯組「羌族の祭山会」(『羌族社会歴史調査』、1986)197-199頁より作成。



一方、四川の漢族農村では、農曆 10 月 1 日は「牛王誕」（あるいは「牛王会」）の日であった。牛を農事から解放して労う儀式を行い、農閑期に入る。『灌県志』18 卷（1933）や『華陽県志』44 卷（1816）には、農曆 10 月 1 日に糯米を搗いて糍粑を作り、牛の角にかけて牛を労ったとある。興味深いのは、南部羌族地区の祭山会では集団で山の神を祀った後に、この漢族の牛王会が戸別に導入されていることである。例えば理県蒲溪では、午前から午後にかけては集落全体で祭山会を行い、その後、夕方から数戸の牛の共同所有者単位で牛王会を行う。当日、神棚の牛王菩薩には豆腐などの供物を供え、牛の角に粳米で作った餅ズバとチンクー麦で作ったモモを掛ける。牛は終日ムラ内に放って自由にさせ、牛の共同所有者間で次年度の使用の順番などを相談する〔松岡 2000、138～139〕。換言すれば、定住農耕を主な生業とするようになった南部方言区では、漢族との接触によって農業の様々な技術、とりわけ犁牛による耕作法を学び、10 月からの出稼ぎによって現金収入をえた。このような漢族社会との接触を通して農曆の牛王会や春節は次第に導入されていったのではないかと考えられる。

また中国王朝側の支配を比較的深く受けた南部方言区では、王朝側からの農曆による統治も無視できない。『汶川県志』[1992、797]によれば、民国時代、毎年、立春には県政府主催の「迎春典礼」が行われた。春官に扮した県吏を先頭に紙製の春牛と紙花を手にした農民が春場壩に行き、シビが羊皮鼓を打って皆で芒神を捕らえ、穢れを祓う。その後、春官が「春牛年表」を各戸に配る、とある。この「春牛年表」が農曆かと思われる。

しかし南部のチャン族は、完全に王朝の支配を受け入れ、農曆に従ったわけではない。筆者の聞き取りによれば、チャン族は、歴史上の記憶として、長年にわたって北上する漢族に居住地を奪われ、現在の山間部に追われたと伝えており、一方で、現実の記憶として、かつて徴兵や税金で常に苦しい生活に落とされ、日常的に差別され、蔑視されたと語り継いでいる。そしてこのような歴史と現実の記憶は、清代以降の王朝側との戦いに敗れるたびに、彼らに統治者側に対する「面従腹背」という態度をとらせるようになった。新年についても、漢族との共存を示すシンボルとして春節を行うと同時に、1950 年代頃までは 10 月 1 日あるいは 8 月 1 日を民族独自の新年として行っていた地域も少なくなかったという。

## おわりに

羌暦年は、1988 年 10 月、四川省阿壩藏族羌族自治州政府によって制定されたチャン族の新年である。州政府は、10 年あまりの年月をかけ、チャン族代表の意見を聞きながら農曆 10 月 1 日をチャン族の本来の新年であるとしたとする。しかし一般のチャン族にとって羌暦年という言葉は初めて聞く語彙であり、10 月 1 日という日にちも南部方言地区以外のチャン族にとってはなじみの薄いものであった。しかもチャン族が新年を漢族の春節で行うようになってすでに半世紀以上を経ている。そのため制定後約 20 年たっても、羌暦年はあまり普及していない。

政府側は、つぎのような政治的意図をもって羌暦年を制定したと考えられる。改革開放後、中央政府が少数民族優遇の諸政策を進めるなか、阿壩州においてはその一つとしてチャン族の「復権」が推進された。背景には、チャン族の急激な人口増加があった。チャン族の総人口は 80 年代の民族回帰による人口増が急で、90 年までには 55 年時の約 5.6 倍、州の総人口の約 17% を占めるに至った。そこでまず 1986 年に阿壩藏族羌族自治州が阿壩藏族羌族自治州に改められ、88

年には自治州条例の民族独自の言語や風俗習慣、伝統行事を尊重するという方針に基づいて羌暦年が定められた。すなわち羌暦年は、政府の公認を得て、「国民文化」の一つとして公式デビューを果たしたということになる。しかしこの決定に参画したチャン族代表は、いわゆる民族幹部や民族知識人であり、その理想は民族のために尽くすことであるとはいえ、党の教育を受けて養成された人々であったため、民衆の感情とはかなり離れていた。

また制定された羌暦年は、この祝日の基となった伝統の歳時リメジとは内容的に大きな違いがあった。伝統のリメジは、シャーマンの主導によって山神や天神に犠牲をささげ、一年の収穫に感謝して新年の平安と稔りを祈るという宗教的側面を強くもっていた。チャン族の伝統的な考え方によれば、山間の厳しい自然環境におかれた彼らの暮らしは、山の神に代表される超自然的な力によって守られており、それに背く者は災いをうける。そのため毎年定期的に神を祀った。しかしこれは人民共和国下の度々の政治運動のために50年代以降はほぼ自主的に中断され、シピも厳しい批判を受けてほとんど活動しなくなっていた。

ところが羌暦年では、一家一族においては団欒、民族集団としては新しい歌舞を中心とした文化藝術会、経済貿易交流会、学術検討会が主な活動とされ、従来のシピを中心とした宗教的側面については文化大革命時期に厳しく批判されたまま、再認されることなく放置された形となった。そのため羌暦年は一般の若いチャン族にとっては伝統の歳時の復活ではなく、彼らの生活向上の時期と重なる新しい祝日であり、中高年にとってはなじみのない祝日としてとらえられた。シピの活動は、近年はむしろ重要な観光資源の一つとしてこの日の観客用の演目となっている。

「羌暦年」は、確かに現在の世代にはほとんどなじみがなく、記憶にとどめられたものではない。しかし彼らの生活サイクルや伝承をたどれば、1年を冬至によって寒暑に2分する冬至歳首暦に類似した古羌暦の存在が推測される。10月1日のリメジに代表される山の神祭りの活動は、まさに日読みに基づく古羌暦の存在をうかがわせるとともに、南への移動によって漢族と接触し、漢族に定住農耕を学ぶなかでその農曆や儀礼を導入していった過程を反映したものである。換言すれば、羌暦年はおそらく古羌暦を原型とするチャン族の暦であったと考えられる。しかしその記憶が途絶えて久しく、最も重要なシピを中心とした宗教色が消されていたために民族の精神的な支柱となるものが示されていなかった。この点に国家と一般のチャン族との意識のズレがあったといえる。

#### 〔注〕

- (1) 周星は、「国民文化」を各民族或いはエスニックグループ、地域および方言集団を超え、国家アイデンティティの意識を強化するものとし、4つの特徴をあげる。第1に政府の主導、第2に普通話、第3に電子メディアと印刷物メディアの影響力、第4に族際的的文化共有現象の全国化、政府によるメディアを通じた社会的コントロールの強化である〔周星 2005、120-121〕。
- (2) チャン族は、総人口306,072人(2000年)、青藏高原東端の海拔高度2000~3000メートルの峡谷地帯に居住する。古代の遊牧民古羌の末裔であるという伝説をもち、岷江流域に定住してすでに2千年以上を経る。シピ(シャーマン)を擁し、家屋の屋上や山間の神樹林に白石を置いた塔を造って山の神を祀り、伝来のすぐれた石積みの技術によって数十メートルの碉楼を築いた。白石をシ

ンボルとする山神信仰や碉楼は、藏彝走廊のチベット族諸集団にもみられる共通の文化的要素である。

- (3) 『中国原始宗教資料叢編』「羌族卷」第4章崇拜活動与儀式的年節礼(1993、569-573)で胡鑑民(1944、569)は、羌民の新年は夏暦の10月1日であるが、ちょうど収穫の時期にあたるため、新年はまた収穫祭でもあり、新年の宴を「収成酒」ともよぶ、という。また10月1日に収穫祭を行う茂県の三齊十八寨(三龍郷)、新番旧番二十余寨(三龍郷)、汶川県の上水里(雁門郷)、克枯郷と龍溪郷、理県の城関区と桃坪郷など7例をあげる〔胡 1944、569〕。
- (4) 中華人民共和国政府によって養成された民族幹部は、政府のコントロール下での民族の将来と利益を考えて動くが、それは時には結果的に一般大衆の考え方とは異なる場合がある。例えば冕寧県出身の民族エリートM氏は、1980年代まで西番族を名乗ったナムイ・チベット族をチベット族に改めることを強く提言した。しかし冕寧県子耳郷のナムイは、現在もそれに反発している〔松岡 2005、128-129〕。
- (5) 「木姐珠」は「木吉卓」ともよばれ、「羌戈大戦」となるぶチャン族の代表的史詩で、シピの経典に伝えられている。人間界のチャン族斗安朱が天界の仙女木吉卓と結婚するために、天帝から幾つもの難題を出され、乗り越えていくという難題婿モチーフがみられ、その難題解決は焼畑農耕の習得を示すものである。「木吉卓」は新年を迎える時に語られており、史詩を通じて焼畑耕作という生業の方法や日常の慣習が代々、語り伝えられている〔四川省編輯組 1985、161-166〕。
- (6) 明清時代に流行した「消寒図」は、梅の81の花弁を毎日1瓣ずつ塗りつぶし、すべて色づいた時には啓蟄後5日、すなわち2月初旬となって寒さが尽きるとする民間暦である。これは全国に広くみられるが、宋の頃の風習に起源するといわれ、周遵道『豹隱紀談』に呉地方の九九の数え歌「尽九歌」が記されている〔中村 1988、230-231、247-248〕。明代万暦年間には「司礼監刷印<九九消寒詩図>」という官版印本も表れ、年画として残されている〔王樹村 1991、35-36〕。
- (7) 羌暦年8月1日説については根拠がはっきりしないが、八一が暦法の基本定数であること、漢の武帝の改暦による太初暦が一朔望月の長さを29と81分の43日にしたことから八一分法と呼ばれていること〔藪内 1990、21-25〕、中国の民間暦の一つである九九消寒図も九九=八一を基本定数としていることなどがわかっている。
- (8) 山の神を祀る「祭山会」は、四川省西部の「藏彝走廊」に居住するチベット族諸集団に広く共有される歳時である。彼らはチベット・ビルマ語派チャン語支に属する言語をもち、かつて西番と総称されて白石崇拜や数10メートルの碉楼などの共通した文化的要素をもつ〔松岡 2006、27-28〕。

#### 〔参考文献〕

##### 1. 日文

- 青木信仰 1982.『時と暦』東京大学出版会
- 周星 2004.「中国民俗学における文化研究が現在直面している基本的問題」『激動する世界と中国—現代中国学の構築に向けて—』愛知大学 21世紀 COE プログラム国際中国学研究センター2004年度国際シンポジウム
- 中村喬 1988.「十一月冬至節」『中国の年中行事』平凡社 221-249
- 松岡正子 2000.『中国青藏高原東部の少数民族 チャン族と四川チベット族』ゆまに書房
- 2005.「川西南の西番における民族識別(1) —プミ語集団の場合」愛知大学国際問題研究所『紀要』126号 113-133
- 2006.「藏彝走廊のチベット族と漢族」『漢族・少数民族の結合〜クロスオーバー的視点からみる漢族と少数民族の社会と文化(資料集)』愛知大学 21世紀 COE プログラム国際中国学研究センター国際シンポジウム
- 宮田登 2006.『日本を語る5 暮らしと年中行事』吉川弘文館
- 藪内清 1990.『贈呈改補 中国の天文暦法』平凡社

##### 2. 中文

- 北川県志編纂委員会編纂 1996.『北川県志』方志出版社
- 陳久金・盧央・劉堯漢 1984.『彝族天文学史』雲南人民出版社
- 胡鑑民 1944.「羌民年節中的迷信經濟習為」『民族学研究集刊』第4期(1993.『中国原始宗教資料叢編(羌族卷)』所収)
- 黄布凡・周發成 2006.『羌語研究』四川出版集團・四川人民出版社
- 黎光明・王元輝 1929.『川西民俗調查記錄1929』中央研究院歷史語言研究所
- 錢安靖編 1993.「羌族卷」和志武・錢安靖・蔡家麒主編『中国原始宗教資料叢編(納西族卷等)』上海人民出版社 433-600

- 冉光荣・李紹明・周錫銀 1985.『羌族史』四川民族出版社  
『羌族詞典』編纂委員会編 2004.『羌族詞典』巴蜀書社  
四川省阿壩藏族羌族自治州茂汶羌族自治県地方志編纂委員会編 1997.『茂汶羌族自治県志』四川辞書出版社  
四川省阿壩藏族羌族自治州地方志編纂委員会編 1994.『阿壩州志（上・中・下）』民族出版社  
四川省阿壩藏族羌族自治州汶川県地方志編纂委員会編 1992.『汶川県志』民族出版社  
四川省編輯組 1985.『羌族社会歴史調査』四川省社会科学院  
四川省理県志編纂委員会編 1997.『理県志』四川民族出版社  
孫宏開 1980.『羌語簡志』民族出版社  
王明珂 2003.『羌在漢藏之間：——一個華夏歴史邊緣の歴史人類学研究』聯経  
王樹村 1991.『中国民間年画史図録（上）』上海人民美術出版社  
西南民族学院民族研究所編 1954.『羌族調査材料』  
俞荣根主編 2000.『羌族習慣法』重慶出版社